

# モードは語る

中野 香織

毎年、旬な文化的テーマを掲げてファッション展を開催する「メトロポリタン美術館コスチューム研究所」は、2019年春の展覧会のテーマを「キャンプ (camp)」と発表した。野営のことではない。芝居がかっていたり、過剰であったり、悪趣味だったり、皮肉が効いていたり、ゆえにたまらない魅力となるような感覚のことだ。語源はフランス語で「身構える」「立ちほだかる」という意味の「se camper」。1964年にスーザン・ソントグが『『キャンプ』についての覚書』を書いて広く知られるようになった。

ファッション史にみられるキャンプな例は、レディー・ガガがLGBTの権利

## 「キャンプ」の真骨頂

# 予測不能な劇場型悪趣味

を守るため着用した生肉ドレスや、オスカー・ワイルドが画一的な黒スーツに抵抗して着用した唯美主義衣装など。「常識」を振りかざす社会に立ちほだかり、過剰なほどの皮肉を効かせ、挑発してみせるのがキャンプの真骨頂。社会性を帯びた劇場型悪趣味といえようか。

今、なぜキャンプか。企画した学芸員のアンドリュー・ボルトンは「ニューヨーク・タイムズ」のインタビューで次のような趣旨を語る。「現代の私たちは多くの領域でキャンプなものにさらされている。トランプ大統領もとてもキャンプな人物だ。タイムリーなテーマだ」

なるほど、ツイート一つで側近の解任



過剰な表現による皮肉や挑発が「キャンプ」の真骨頂 (米メトロポリタン美術館提供)

を公表するなど、良識に逆行する劇場型悪趣味とよべる言動を重ねる大統領もまた、「キャンプ」にくくられるとは。そういえば、落札が決まった瞬間に絵が崩壊する仕掛けをほどこしたバンクシーのアートもまた「キャンプ」と呼べるだろう。この大統領もアーティストも、従来の常識を転覆させる予測不能なやり方で世界を翻弄する。それを痛快と感じる一定の層がいるゆえに、根強い人気を保っている。

キャンプの是非は社会や状況に応じて変わる。現在のようなキャンプの台頭は、従来の真・善・美の基準が覆されていく時代を象徴する。正義や公正さの基準も崩壊しつつある。譲れることと譲れないこと、その基準を各自がこれまで以上にしっかりと持たねばならない時代でもあることを、モードは警告する。(服飾史家)